

重要有形民俗文化財

下谷上の舞台（農村歌舞伎舞台）保存修理現場 一般公開

ー 修理作業の状況と屋根裏の舞台装置の公開 ー

創建から 185 年の歴史を持つ農村歌舞伎舞台の修理

国指定重要有形民俗文化財「下谷上の舞台」は、歌舞伎舞台専用の茅葺建物です。天保 11（1840）年の棟札を持ち今年で 185 年の歴史を積み重ね、地元住民の手で今日に継承されています。建物空間を最大限に活用し、多彩で大掛かりな舞台装置が組み込まれています。

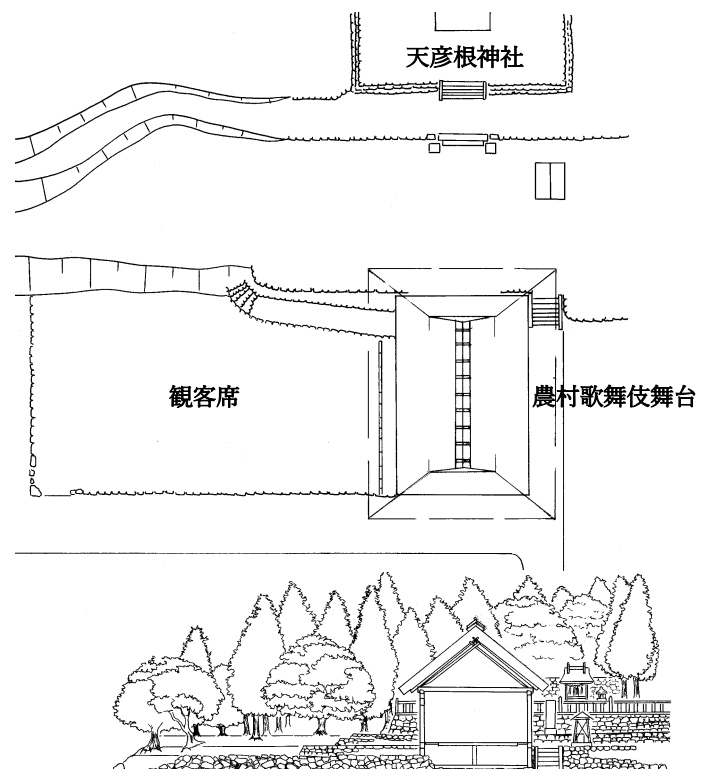
現在、20 年ぶりとなる茅葺き屋根の葺き替え修理を行っています。修理のため、古くなった茅材（ススキ）を屋根から降ろし、骨組みだけになった屋根裏には、巨大な舞台昇降装置が仕込まれています。

また、当地の茅葺建物では最大級の規模でそれを可能にした職人の技が随所に見られます。創建から 185 年、地域住民の熱い思いで受け継がれてきた農村歌舞伎舞台を深く知る機会です。天彦根神社境内・鎮守の森に築かれた農村歌舞伎舞は、周囲の環境と一体となった野外劇場となっており、舞台全面に石垣で囲った観客席が設けられています。

この資料は下谷上自治会農村歌舞伎舞台保存管理会、淡河かやぶき屋根保存会くさかんむりの協力を得て、文化スポーツ局文化財課が作成しました。



2022 農村歌舞伎上演会



天彦根神社境内図

保存会からのひとこと

私たち保存会は、先人達から脈々と受け継いできた農村舞台という宝物を次世代に譲り渡すため、職人さんたちと力を合わせてよみがえった農村舞台をつくるため日々頑張っています。早く完成した舞台を見たいです。

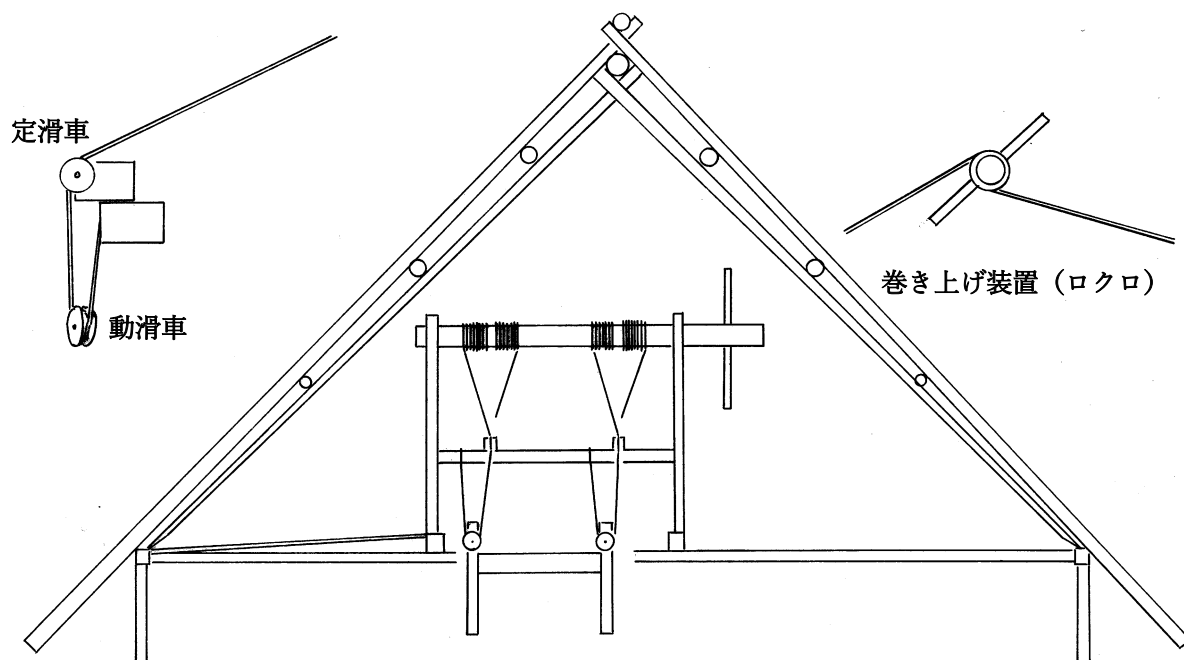
屋根裏に仕込まれた大掛かりな舞台装置

1階の舞台面から5 m上の屋根裏には、舞台昇降装置やぶどう棚が設置されています。観客席からは見えませんが、観客を驚かせるダイナミックな場面展開や舞台演出を可能にする装置です。



文化財課学芸員からのひとこと

創建から185年の歴史を持つ農村歌舞伎舞台は、創建時の部材や火災後復興を遂げた昭和52年の修理が重なり合っています。その時々の職人の技術と工夫が読み取れます。今回の修理記録を作成すると共に、これまでの修理の履歴や舞台装置、道具についても調査していきます。



屋根裏舞台昇降装置イメージ図



巨大な舞台巻き上げ装置（ロクロ）

舞台上約 4.5m に設置された舞台を昇降させる装置です。直径 18 cm の丸太材に縄を時計廻りと逆時計回りに巻き付け、小舞台の支柱に取り付けた定滑車と動滑車を組み合わせて、長さ 7.5m、幅 1.2m の舞台を自在に吊り上げ、吊り下げる装置です。



屋根裏いっぱい設置されたぶどう棚

1 階の舞台面から約 5 m に設置されています。直径 8 ～ 10 cm の太い竹を格子に組み、藁縄で結び固定しています。この棚には、歌舞伎の様々な場面に応じた背景幕を吊るしたり、竹に蝋燭を立ててほのかな明かりを揺れ灯す「るり燈」などを吊り下げ、演出効果を高めます。

伝統的な茅葺き技術で修理

茅葺きの技術は、その土地の気候風土によって適した素材と工法が使われます。例えば「かやぶきの里」で有名な京都府北部の美山地区では、一本のススキを半分に切った切り茅を使います。一方、神戸の茅葺きは、ススキの根元から穂先までの長い一本ものを使います。ススキだけでなく稲わらや古茅（古いススキ）も適材適所で使い葺き上げていきます。今回使うススキは、岩手県金ヶ崎町（南部茅）と熊本県阿蘇産（阿蘇茅）で品質の異なる茅を交互に葺くことで安定した茅葺屋根を作ります。道具も茅葺き専用の独特なものです。また、職人達が使う長さの単位も特徴的で、多くは体の長さ（身体尺）を基準にしています。例えば茅を葺く時の「1枚」という単位は、両手の指先を合わせ小さな輪を作った長さです。



かや葺職人の作業

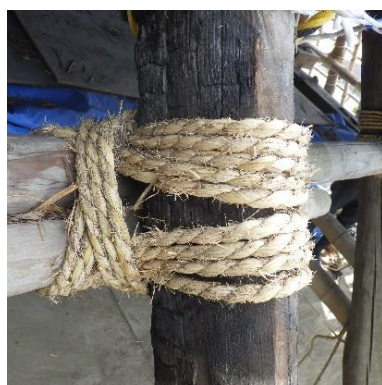
葺く（ふく）



縫う（ぬう）



結ぶ（むすぶ）



叩き締める（たたきしめる）



茅葺き職人からのひとこと

茅葺き屋根は昔から変わらない工法で今も作られています。藁縄で結んだだけなので弱そうに見えますが、実は地震や台風などの自然の力を、柔らかに受け流すしなやかな強さがあります。現代の科学技術とは違う、永い時間をかけて磨かれてきた知恵を感じてもらえれば嬉しいです。